



— 一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN



NIPPON-BOLIVIA

<http://nipponbolivia.org>

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

042-673-3133

日本ボリビア協会会報誌

カントウータ

Cantuta No.27

目 次

1. 南米-ボリビアの名峰ワイナポトシ「6,088m」登頂への軌跡・本間 奈生美
2. ボリビアに根付く武士道精神・・・・・・・・・・・・・・・・江崎 浩司
3. 民族衣装にみるラテンアメリカ先住民のアイデンティティ・・森井 勇介
4. ボリビアなど開発途上国向け中古車・中古医療機器の  
輸出ビジネスと社会貢献・・・・・・・・宮本 明岳
5. アイデンティティと言語 — 選択と郷愁・・・・・・・・田中ネリダ

## 1. 南米・ボリビアの名峰

### 「ワイナポトシ 6,088m」登頂への軌跡

本間奈生美(団体職員)

#### ワイナポトシを選んだ動機

なぜワイナポトシ (Huayna Potosi) なのか？

極めて不純な動機だが、誰かのブログのキャッチコピーに、「ワイナポトシは世界で最も易しい 6,000m 峰」とあったからだ。しかし、実際はそんな生易しいものではないことを、後から身を持って知ることになる。

私は職場に山の会があったことを契機として 2007 年に登山を始め、その年に日本最高峰「富士山 3,776m」に登頂した。もっと高いところに行ってみたくなり、2009 年に海外登山へ初挑戦し、東南アジア最高峰マレーシア・ボルネオ島の「キナバル 4,095m」に登頂、その後も 2010 年にメキシコ第 4 位の高峰「トルーカ北峰 4,620m」に登頂、さらに高度を上げ、2011 年にはタンザニアにあるアフリカ大陸最高峰「キリマンジャロ 5,895m」への登頂を成功させた。ここまできてさらに高い山で目指せる山がなくなった。それは、キリマンジャロこそが素人の登れる最も高い山だからだ。素人が登れる山というのは、特別な技術なくして登れる山を指し、つまり、雪がなく、一般ハイキング装備で山頂までたどり着けることを意味する。もちろん高山病のリスクは除いての話だが、それさえ克服できれば山頂を極められる。

キリマンジャロ登頂後、特別な技術なくして登れる更なる高い山がないか、私は必死で調べたが、残念ながら 6,000m 峰につきまとうキーワードはどこもかしこも雪山技術であった。即ち、雪山技術がないと、6,000m 峰は無理ということだ。こうなると一気に難易度は上がる。登山情報サイト「ヤマケイオンライン」の 2012 年の調査によると、登山者の約 35%しか雪山登山を行っていない。※文末参照。

しかし、私は更なる高みを目指して雪山登山の世界に足を踏み入れた。雪山が難しい主な理由は、  
1. 気象条件の厳しさ (寒さ、風雪)、2. 登山ルート

が雪に埋もれて道を見失いやすい、3. アイゼンやピッケルなどの特別な装備を使つての登攀技術が必要、4. 休憩をゆっくり取れる場所が少ない、などが挙げられるが、私自身、雪山を始めてみて一番感じたことは、雪山は夏山の 3 倍程度の体力が必要だということだ。特に私のような小柄な女性にとって、腰まで埋まる雪をかき分けて登るラッセル登山での体力消耗は半端ではない。雪山登山して下山すると大げさでなく 2kg は体重が落ちる。従って、雪山登山者の大半は壮年期までの男性が中心で、カラフルな登山着で夏山を彩る山ガールたちは、冬になるとどこへ行ったのだろうかいつも感じる。

雪山登山にある程度慣れ、いよいよこの山に挑戦するかを検討する段になり、高い山を目指す難しさのもう一つの側面に気付いた。それは、必要日数だ。私のようにバリバリの働きざかり世代の者は、年末年始、ゴールデンウィーク、夏休みを除いて長期休暇を取ることは極めて難しい。しかし、日本往復の時間、山麓までのアクセス、登山口から山頂までのアプローチの長さ、高度順応の問題などを考えると、どうしてもある程度の日数が必要になる。世界の高峰を目指すには一般的に 3 週間が必要なことを知った。例えば、比較的難しい雪山技術は不要と言われ、高峰登山の入門に挙げられるネパールの山々では、どこもその程度の日数が求められる。

そんな中、ボリビアには日本発着 10 日前後で行ける 6,000m 峰があると知り、私は飛びついた。それがボリビアのリアル山群にあるワイナポトシであった。調べてみると、技術的にも比較的易しく (実際はそんなに易しくなかったが)、登山口までのアクセスもボリビアの首都ラパスから北へ約 2 時間と手頃、ラパス発着 2 日～3 日間で登れるという。さらに、日本人の若いバックパッカーたちも数多く挑戦しているらしい。

こうして、いざワイナポトシへ、ということに決めた。

## 登頂のための準備

ワイナポトシを目指すことに決めてから、この山に挑戦した方のブログなどを読みあさった結果、登頂成功の鍵は、1. 高度順応、2. メンバー間の足並み調整、3. 天候、という結論に達した。しかし、このとき私は大きなポイントを見逃していた。それはアイスクライミングの経験・技術だ！

高度順応がとにかく大事だと理解した私は、ボリビアへの渡航直前に、世界最高齢エベレスト登頂者の三浦雄一郎氏経営の低酸素室で5回の高所トレーニングを行い高峰登山に備えた。

また、ラパスに到着してからもすぐに登山を開始するのではなく、ラパスの高地に体を慣らすために休息日を設けたり、さらにはラパス近郊にあるチャカルタヤ 5,395m にも登ったりと、高地仕様の体作りに努めた(行程表参照)。これらのお陰で、登頂時にもいわゆる息切れだけで、高山病の症状はほとんど出なかった。

表 1 行程表(2016年)

4月26日(火)	午前成田発→ダラス経由→マイアミ経由
4月27日(水)	→早朝ラパス着 着後自由行動 夕刻登山ガイドからブリーフィング
4月28日(木)	終日チャカルタヤ登山(日帰り)
4月29日(金)	自由行動
4月30日(土)	ワイナポトシ登山1日目 午後からアイスクライミング 4,700m 山小屋泊
5月1日(日)	ワイナポトシ登山2日目 4,700m→5,130mへ 5,130m 山小屋泊
5月2日(月)	ワイナポトシ登山3日目 5,130m→6,088m 山頂へ→4,700m まで下山
5月3日(火)	午前自由行動、午後市内観光、夜フォルクローレショー
5月4日(水)	早朝ラパス発→マイアミ泊
5月5日(木)	朝マイアミ発→ダラス経由
5月6日(金)	→午後成田着

加えて、登頂時のメンバー内での歩くスピードや他のメンバーの体調に左右されないよう、プライベートガイドを雇いマンツーマンで登ることに決めた。また、今までの経験から重い荷物を背負って高地を歩く辛さを知っていたため、プライベートポーターも頼むことにした。なお、ラパス市内に多数ある旅行会社でも、直接ワイナポトシ登山ツアーに申込みことが出来、その場合はかなり

の格安価格であるようだが、現地で適当な旅行会社を探す手間や、語学力の問題を考慮し(私はスペイン語が全く分からない)、私は予め、東京・恵比寿にある中南米専門の旅行会社ラティーノに、日本発着時の航空券を始め、ラパス市内のホテル、登山ガイド手配など一式すべてをお願いした。これは結果として大正解となり、出発までのフォロー体制も万全、行程も私の希望通りに何度も組み直し手配のし直しの手間を惜しまず対応してくださった。それでも日本からガイドが同行するような、いわゆるツアー登山ではなく、スペイン語も出来ないのに女性一人で未訪の地ボリビアに乗り込み、英語ガイドと自分の二人だけでワイナポトシに登ることを決断するには勇気が必要だった。また、決めた後も不安で堪らなかった。

天候に関しては、運次第で何ともしがたいが、雨季は外し乾季のシーズンを選んだ。幸い私がラパスに入ってから去るまで、一度も一粒の雨も降らず、空は毎日澄み切った青一色であった。

## いざワイナポトシ山頂へ

こうして臨んだワイナポトシ登山、結果的には登頂できて万歳三唱だったのだが、なかなか一筋縄ではいかなかった。

まずは、初日の午後、高度順応も兼ねて午後から緩斜面でのアイスクライミングの練習に出掛けたところで、事件その1が起きた。この山は私が想定したような雪山ではなく完全に氷の山ではないか！雪と氷では当然必要な技術は異なる。いわゆる足さばき、アイゼンワークが全く違うのだ。雪の道は埋もれることはあっても滑りにくい。仮に滑っても止まりやすい。一方、氷の道は極めて滑りやすい。万一滑り出したらまず止まらない。傾斜にもよるが急斜面では、アイゼンの前爪をしっかり効かせて氷面に突き刺していかないと、すぐに滑落してあの世行きだ。これは大変まずい。私はほとんど氷の山を登った経験がない！しかし、ここでそんなことを言っても全く無駄なので気を取り直して練習するも、案の定滑ってなかなか安

定しにくい。この短時間の練習だけでコツを掴むのは困難だ。はて、こんな状態で私は山頂へたどり着けるのか、非常に不安な気持ちになる。

続いては、氷の壁を登る、いわゆるアイスクライミングをやるという。ここで、事件その2が発生した。ガイドに連れていかれた壁を見て私は腰を抜かしそうなほど驚愕した。壁はほぼ垂直だ。私は練習する前の段階で、「こんなところは登れない!」、とガイドに抵抗心を示した。しかし、ガイドは笑って言う、「大丈夫、大丈夫、実際にはこんな傾斜のところはないよ、余興の一種だと思えばいいさ」。このとき私は恐怖心とかそういう気持ちでやりたくなかったのではなく、残念ながらできる気が全くしなかったのだ。たまたま同タイミングで同じ壁の前にやって来た20代のオーストラリア人夫婦は、「楽勝」だとか言って、スイスイ登っていった。私の気持ちはますます萎える。ガイドに「さあ、君の番だ」と言われ、苦し紛れに足を一歩踏み出し、ピッケルを振り上げ氷に打ち込むが、全然力が足りず氷に刺さるまでに4回もピッケルを振り回した。この時点で腕がすりすり、足は今にも壁から滑り落ちそうだ。次に左手で同様の動きを取るも、左手は利き腕でないから更に力が弱く、氷の前に全然歯が立たない。それでも何とか刺さり、さあ右足を一歩上へ出し、つるつるの氷のどこに足を置こうかなどと考えているうちに、残念、左足の力が尽き滑り落ち、氷壁に両膝を強打、ロープに吊るされたまま私は宙ぶらりん状態となり、「ソコーロ！（助けて）」と叫び、アイスクライミングの練習は終了。全然話にならない。駄目っぷり満点だ。その後山小屋に戻るも、気分落ち込み、全く食欲がない。アイスクライミングが必要なんて聞いていない！「一部斜度のある壁もあるが長くはない、アイスクライミング技術があると楽に通過できる」、というどこかの会社のワイナポトシ紹介の記事を見た気がするが、ここではその技術は必須じゃないか！

2日目、気持ちは沈んだまま、ほぼ無心で歩く。幸い今日は全く難所なしだ。あまりに落ち込んだ

様子をガイドに見せると、山頂へ連れて行ってもらえないと危惧し、作り笑いなどをしてごまかす。明日は夜中の0時起床で1時出発、順調に行けば日の出直後の7時に山頂だという。「もうどうとでもなれ、とにかく登れるところまでは登ろう」と開き直って気持ちを奮い立たせる。

3日目、0時起床、幸い高山病の症状は全くといっていいほどないが、とにかく眠い。ガイドは、今は寒くなくても山頂はここより遥かに寒いから、十分重ね着をして暖かくしていこうとアドバイスしてくれた。このとき素直に言うとおりにしておけば良かったのだが、今そんなに着込むと暑いし、動きも悪くなるからと思い、ちょっと薄着で出かけてしまった。後で大変な後悔をすることになる。

真っ暗な中を歩き出す。空を見上げると星が手に届きそうだ、しかも一面の星！こんな星空を見たのは生まれて初めて。言葉にできないレベルだ。歩き出して5分ほどで、「ここからアイゼン着けるように」、とガイドから指示が出る。いよいよ氷の山へ突入だ。ちょっと緊張してきた。何せ周りは真っ暗で何も見えない。

アイゼン歩行開始、夜中で気温が下がっているせいか、練習のときよりさらに氷が固い。いわゆるカチンコチンな状態だ。これは恐ろしい。滑ったら完全にアウトだ。ガイドとロープで繋がっているため、私が滑ればガイドも真っ逆さまに道連れへ。気持ちを集中させて歩く。それにしても、登山道が狭い。両足を普通に置ける場所がない。しかもかなりの急斜面で、片側は切れているようだ。斜度がきついためジグザグに道をとっているが、向きを変えるときにロープを足で踏みそうになるし、ピッケルの持つ手を変える作業も発生するなど、全身神経を使えばなしである。そして、忘れてはならないのは、ここは高度5,200mを超える場所、酸素は地上の約半分しかない。何かだ息苦しくなってきた。初めて酸素の薄さを痛感する。ペースが上がらない。夜中出発でほとんど何も食べてないから、お腹も空いてきたような気がする。足もアイゼンの重量と酸素不足の相乗効果で恐ろ

しく重い。というかこのガイドは全く休憩する気がないのか、そんなこんなでガイドに休憩を求めると、休むと寒くなるからなるべく休まない方がいいと言う始末。出発から45分ほどで比較的平らな場所に来たのでやっと休憩。ここまでの道のりだけで疲れ果てた。この先は平らな場所は少なくほとんど休憩できないらしい。冗談はやめてくれ。ガイドに現在いる位置を聞くと、この地点で山頂まで約7分の1とのこと。フー、キツイ。呼吸も苦しいが、それよりも周りが見えず、自分がどこを歩いてどこへ向かっているのか判らないストレスも大きい。休んでいたら寒くなってきた。早々に休憩を切り上げる。

その後も、コンスタントに急斜面を登り続ける。容赦ない山だ。なだらかな斜面が少ない。ずっと登りっぱなしだ。全然スピードが出ない。座って休む場所がないから、疲れたら立ったままピッケルに寄りかかって休むしかない。高度計を見て5,500mを超えたあたりから、歩く速度が格段に落ちてきた。力が出ないのだ。速度を落とすと、寒さが身にしみてきた。薄着過ぎたのか、顔も冷たい、手も冷たい、上半身がとにかく冷える。ガイドの言う通りに着込まなかったことを猛烈に後悔する。もっと服を着込みたいと思うが、現在着ている服の上からハーネスを着けているため、さらに上に着ることはできるが、今着ているものを脱いで中に何かを着ることができない。不自然だが寒さに耐えられないので、仕方なくアウターの下に着るべきインナーダウンを一番外に着る。コートの上からセーターを着ているかのような非常に不自然なファッションだ。

引き続き低速なまま歩き続けていると、いよいよ、最大の難所である氷の壁がやってきた。冷静に壁を見上げ、はて登れるのかと考える。よく見ると、斜度は練習のときほどではなさそうだ。しかし、氷でカチンコチンなことには変わりはない。いかにも滑ってくださいと言わんばかりだが、一つ明るい気持ちにさせられたのは、足場が比較的広そうなことだ。多くの人々が登っているため踏み

跡がどんどん固められていて、壁の途中のあちこちに足置き場のようなスペースができ上がっている。暗くて上まで見通せないのどのくらいの距離があるのか分からないが、何となく行けそうな気がしてきた。登り始める、おっ、行けそうかなと思ったのも束の間、氷に手を掛ける場面も何度かあるため、手袋が濡れて手が冷たくなり過ぎて感覚がなくなってきた。これは辛い。それでも気合いで登るが壁の終わりが見えない。あまり長くないという触れ込みは嘘だったのか。運動量が多いため息が苦しく壁の途中で何度も止まってしまう。呼吸を整えまた登る。この作業をひたすら繰り返しようやく壁の終わりを視界に捉えた。よしと最後の力を振り絞って登り切る。やっと壁は終了。もうクタクタで体が動かない。倒れこんで休憩。

腰を下ろすと、一面の闇の中にキラキラと光る灯りが目に入る。ラパスの夜景だ。夜景が綺麗だ、なんて安易な言葉では表現し尽せない。綺麗というよりは輝かしい、まばゆい。どんなダイヤの煌きをも凌ぐ、私のためだけの特別な宝石箱だと思った。クリスチャンでもないのに不思議と神様ありがとう、と呟いてしまった。

現実に戻り、ガイドにあとどのくらいで山頂かとたずねると、まだ3時間以上掛かるという。本当か、気が遠くなりそうだ。時計を見るとまもなく6時。ということは、山頂到着は9時？日の出直後に山頂ではなかったのか。日の出は6時30分と聞いているから、どれだけ歩くのが遅れたのか？

再び登山開始、お腹が空き過ぎて胃がむかつく。5分に1回はガス欠でエネルギー補給が必要な状態だ。と言っても水を飲むだけ。固形物は咀嚼力が落ちているのか、消化能力が低下しているのか、途中から全く受け付けなくなった。日本から持ち込んだ栄養補給ゼリーがとても有効だったがそれも尽きてしまった。冷たい水は飲む気がしないが、テルモス(魔法瓶)のお湯も尽きたから仕方がない。夜明け前に氷水を飲みながらマイナス20℃の中

を歩いている。冷静に考えると異常な状態だが、そのときはとにかく必死で前に進むことだけを考えていた。

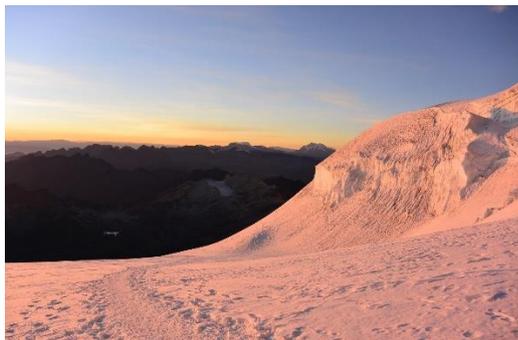


写真1 ワイナポトシ登頂途中、夜明け直前

薄明るくなってきて夜明けが近い。このときまさにワイナポトシ頂上を正面に捉えた。もうすぐ山頂だとぬか喜びしたが山頂まではあと2時間掛かるらしい。時間は6時30分。一段と歩くのが遅くなっているはずが、山頂到着予想時間が早まったのはなぜだ？もうどうでもいい、前へ進もう。

山頂よりかなり手前の地点で夜が明けた。明るくなってくると、自分が歩いている山がとんでもなく大きいことに気付かされると同時に、見たこともない景色が待っていた。辺り一面、氷と雪の世界だ。真っ青な空に、真っ白で巨大な氷河の塊がいくつもいくつも盛り上がっている。その中で、ワイナポトシはひと際存在感を示して正面に聳え立っていた。一刻も早くあの山頂に行きたい。募る思いに比例して登山道の傾斜は容赦なく増してくる。吹き付ける空気はどんどん薄くなる。この山頂までの長い登りが登頂への最後の難関だとガイドは言う。傾斜は40度近い。登山道はどんどん細くなる。足場が狭いのに斜面だけは急になり、さながら壁登りのようだ。それでも少しずつだが確実に前へ進んでいく。

そしてついに私は山頂へ辿り着いた。時間は8時。おめでとう、自分。ガイドはわりと冷静だ。山頂は狭いから気を付けるように、などと言っている。確かに狭い。自分が座りこんだ場所以外、居場所がない。記念撮影を撮ってくれるというガイドの言葉に立ち上がろうとしたが、極度の疲労

と虚脱感からなのか全身がぶるぶると震えて立つことが出来ない。座ったまま手を挙げてパチリと1枚。記念撮影は立ってするものだと言われ、腰だけ浮かした中腰姿勢でパチリ。そんな写真では後悔するとガイドに叱咤激励され、ようやく鉛の



写真2 ガイドからO.K.が出た山頂での記念写真

と共にOKが出た。こうして、私のワイナポトシ挑戦は終わった。

(2016・6・2 記)

#### 参考データの出典先

※「ヤマケイオンライン」みんなの登山白書 登山者の冬の活動に関するアンケート

[http://www.yamakei-online.com/research/fuyu\\_0.php](http://www.yamakei-online.com/research/fuyu_0.php)

## 2. ボリビアに根付く武士道の精神

江崎浩司

私がボリビアに赴任したのは2012年10月のこと。前任地では数人の仲間と共に細々と「居合(いあい)」の稽古をしていた。よって当初はボリビアでかくもシッカリとした基礎を築けるとは想像もしていなかった。現在、総勢30名に届くほどのボリビア人剣士達が居合の稽古をするに至ったことは、私にとって望外の喜びである。

居合道という武道は日本刀を用いることから誰でもイメージしやすいであろう。世界的巨匠である黒澤明監督の時代劇映画に出てくる侍から、アニメ「ルパン三世」の石川五右衛門、最近では時代物のアニメキャラの影響で、うら若き女性達が「お

刀女子」と呼ばれ、博物館で日本刀を鑑賞しているという。

世界的にも優れた武器のひとつと言われる日本刀にこれだけの知名度がありながら、居合を稽古する者は意外に少ない。居合人口として唯一、統計が公表されているのが「全日本剣道連盟（全剣連）の居合部門」で、約8万5千人（2009年）。全国約177万人の組織といわれるこの全剣連でも居合人口はこの規模である。今でも茶の間で時代劇を見る機会が多く、日本刀の知名度がどれだけ高くても、その日本刀を用いる武道である居合の稽古者に会うことは稀であることがご理解いただけると思う。

日本国内ですらこの状況なので、海外で居合を見かけることは殆どない。逆に言うと、海外で居合を見せると大変な反響が返ってくることが多い。

ボリビアでの赴任期間中は、本格的に自らの流派（無外流・むがいりゅう）の稽古場所を立ち上げ、仲間を集めることができると思っていた。しかし、右も左も分からない赴任直後は稽古場の心当たりもない。そこで余暇を過ごすために所属した会員制スポーツクラブの多目的スタジオを間借りし、日曜日の朝に一人稽古をしていた。日本人が皆無のラパス市内のスポーツクラブではあるが、袴姿で稽古用の模擬刀である居合刀を振っていれば注目されない訳がない。会員のみならず従業員までが「これは何という武道か？」と話しかけてきた。しかし、実際にやってみたくて申し出る者は殆どおらず、2か月位は一人稽古が続いた。やがてとある会員の子弟で、空手の経験があるという当時高校生のJ君が訪ねて来て、本格的に始めたいと申し出た。このようにしてJ君は私と居合の稽古を始め、後にボリビアで最初の無外流居合の段位取得者となった。

ラパス市では、ボリビア在住の日系人団体が各種の文化事業を開催し、日本文化の紹介を行っている。各事業には、毎回延べ千人以上のボリビア人が訪れる。着任から約1年後、最初の稽古仲間であるJ君と、その直後に加入したD君と共に、

居合の形や組太刀（くみたち：木剣による打ち合い）を見せる「演武」を行った。ボリビアではおそらく初めてとなる本格的な居合の演武であり大変な注目を浴びた。この演武を契機に、入門希望者が続々とやってくるようになった。しかし、希望者は増えても居合刀の数が十分でない。私の赴任時には、前任地で使用していた自分のものに加え、数本の居合刀を持参したが、希望者に対して圧倒的に数が足りない。また、ボリビアでは海外からの通信販売が十分普及しておらず、海外製品は関税を含めた費用が非常に高額になるので輸入も容易ではない。やむなく一時帰国する度に数本の居合刀を贈答用として持ち込んでいたが、需要に到底追いつかない状況であった。

居合刀がない稽古者は、木剣とプラスチック鞘を使用している。稽古希望者は増える一方であるが、ボリビアでの居合刀の調達は、今なお頭の痛い問題である。



写真3 ラパスでの「演武」の様子(中央が筆者)

2013年は専らラパス市内で稽古場所を増やし、稽古者数も少しずつ増えた。居合の稽古を希望する者は、空手、合気道又は柔道の経験者が多い。中には全くの武道未経験者もいるが、概ね前述の武道を通じてある程度の礼法・作法を承知しているので稽古に馴染みやすい。一方、西洋諸国では日常生活で正座をする習慣がないため、座礼や刀礼をするのに正座ができない者がたまにいる。しかし、最初はできない者も少しずつ足を慣らせばいずれは座れるようになるものである。

ラパス市で稽古を続けていると居合の噂が口コミで各地に拡がり、ボリビア第3の都市であるコチャバンバ市の合気道道場から出張稽古の依頼が

来た。そこで2014年6月に初めて同市の合気道道場で居合の稽古会を開催し、一気に十数名の合気道関係者が居合を始めた。居合道と合気道は体裁き等も共通する点があるようで、彼らには馴染みやすいものと感じた。また、同道場の人達は中国製の居合刀を有しており、意外な入手経路があることに驚かされた。

こうして稽古を重ね、2015年にコチャバンバ市内の見本市会場で開催されたアニメ・フェスティバルにおいて、コチャバンバ剣士と共に演武を披露した。ボリビア人にはアニメも武道も総じて日本文化である。演武後に袴、帯刀でフェスティバル会場を視察していると一般来場者から記念撮影の依頼が殺到した。私達も殆ど「コスプレ」状態であったが、居合の紹介にはとても役立った。

理由は良くわからないが、ボリビア人は実に稽古熱心である。例えば習い事を週1回行えば年間約50回となるが、日本で仕事や学業にいそしむ者が年間50回稽古するのは容易ではない。ところがボリビアで週に3回稽古場を設けると、熱心な者は週に3回欠かさず通い、年間150回稽古する。単純計算で普通の日本人より3倍以上の速さで上達することになる。もちろん、徒に稽古回数を重ねれば良い訳ではない。また、居合は居合刀を振り回すだけの「演舞」でも、単なるスポーツでもない。礼法・作法の修得をはじめ、技量を高め「武士道の精神」を基礎として修行を積むことがなにより重要である。

ラパス市で稽古場の開設当初から稽古を続けてきたD君の技量は、僅か1年足らずで初段位に達した。D君は2015年7月に遠路はるばる訪日し、東京で開催された国際大会(初段の部)に玄黄(げんこう)二刀流で初出場し、なんと準優勝した。この結果にはD君も周囲も驚いたが、ボリビアでの稽古の蓄積からすれば、単なる幸運だけではなく、ボリビアの稽古者全体の士気と意欲の向上につながる喜ばしいことである。

現在、D君は無外流居合参段、玄黄二刀流式段の剣士として、ボリビアの居合を牽引する存在になった。ボリビアでは彼のほかに、既に無外流居合参段の剣士が2名いる。いずれもD君とともに、将来ボリビアのみならず、周辺諸国を含む南米地域の指導者となるべく研鑽しており、テレビや新聞等のメディアを通じて、積極的に居合の紹介・普及に努めている。今後もその活躍に期待したい。

現在、第二の都市であるサンタクルス市でも稽古会が企画され、同市で稽古場ができるとボリビアは一段落。隣国のブラジルやアルゼンチンには既に同門の稽古仲間がいることから、ボリビアの剣士達は、次なる目標としてペルーやチリで居合の紹介・普及を行い、稽古仲間を増やすべく着々と準備を進めている。いずれは南米で連盟が組織され、南米居合道大会が開催されることを夢見て、これからも支援を続けたいと思っている。

(2016・9・10記)

### 3. 民族衣装にみるラテンアメリカ先住民のアイデンティティについて

INDIGENOUS GALLERY 代表

写真家、バッグデザイナー

森井 勇介

民族衣装を身に纏った人々の彩りのある姿には、その土地の風土や文化を感じることができる。しかし、民族衣装を身に纏う人は減り、美しい衣装を身に着けることがステータスであった独自の価値観は薄れてきている。そして、その伝統技術を受け継ぐ人も減りつつある。

私は民族衣装を身に纏い生活をする人々を探し、メキシコ、グアテマラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの約80近くの民族衣装文化が残る村落を見て回ってきた。私がいう民族衣装とは、着飾った祭の衣装ではなく、日常的に着用される衣装で、手織りを基調としたポンチョやマンタ、ウィピルなどを指している。それらは村落ごとに特色があり民族衣装を見ればどこの村の出身者な

のか知ることができる。ある村では全員が赤色を基調とした花柄の衣装を身に纏っているが、その先の村では全員が青色を基調とした動物柄の衣装を身に纏っているといった具合によく土地柄が現れている。そこで生きる動物の毛を使い、身の回りにある草木で糸を染め、信じるもの、大切にすものが柄になり織物となる。寒い地域では厚手の織物を作り、暑い地域では薄手の織物が作られている。それを作るには何ヵ月も時間がかかる。彼らが市場で動物を買うときの姿には希望が溢れ、素材を見分ける目は真剣そのもの。子供たちは親の織物をする姿から見よう見真似で糸を操り、自然に織物を作る技術を習得していく。美しい織物を身に着けていることはステータスとなり、異性に自分の魅力を伝える手段にもなる。民族衣装にはその土地に住む人々の個性ある暮らしや価値観が強く現れている。



写真4 アンデスの民族衣装

しかしラテンアメリカの急速な近代化の影響で、民族衣装を身につける習慣はなくなってきている。今でも村人全員が日常的に民族衣装を身に着けている村は稀で、洋服を着ることが当たり前になりつつある。それは男性、若者、子供、女性の順番に民族衣装離れがあるように思われる。

理由として一つ目には出稼ぎに出る男性が増えている。先住民族が生活をする山岳部にも車が通れる道ができ、交通の便が発達したことで村を出ること、町に行くことが簡単になった。そして都会で仕事をする人々が増え、民族衣装を脱ぎ洋服

を着るようになっていく。先住民族の村でも男性の民族衣装姿を見られるところは本当に少ない。

二つ目には、若者は学校に通うのに制服を着るようになったことだ。先住民族の暮らす村にも学校ができ、教育を受けられる環境になって、制服の着用を義務化しているところが多くなり、そのまま民族衣装ではなく洋服を着るようになっていく。ある村では、25歳以上の女性は民族衣装を身に付け、日常会話がケチュア語で、早くに子供を産み織物を内職としているが、25歳以下の女性は洋服を身に着け、スペイン語を話し、都会へ出て暮らす人が増えている。織物と農業で生計を立てている夫婦は「子供は一人でもいい。この子にしっかりと教育を受けさせ都会で働いてほしい」という。かつては1家庭の子供の数は7、8人が当たり前だったというが、今ではそうゆう家庭は少ない。お金が必要な暮らしになり、先住民族の人々の考え方も変わってきている。

三つ目には、観光産業である。観光客向けに民族衣装を身に着け、商品としての民芸品を作る人々が増えている。彼らにとって大きな収入源となっているが、民芸品は安く買いたたかれてしまうため、織り柄を省略し表面だけを綺麗にする民芸品用の織物が多い。また観光客寄せで表面的に民族衣装を身に纏う人も多く、その品質、クオリティは低い。安価な民芸品作りをしている人々の中には、その仕事に追われ体がもたないと言って織物作りをやめていく人も多い。そこには民族衣装という独自の文化や技術に対する価値の置きかたや評価が低い現状がある。今や、自給自足の昔ながらの生活から、お金を必要とする都会的な生活に環境が変わり、先住民の人々の価値観にも大きな変化が現れている。

しかし、民族衣装を身に着ける人々には、今もなお、歴史を重ね生み出してきた技術と、伝統を受け継いできた独自の視点があり、そこには強いアイデンティティがある。

私が初めて先住民族の村を訪れたのはメキシコだった。全員が青い衣装を身に着けた村で、そこ

では青空市が行われていた。市では糸や織物が多く売られており、彼女たちは糸や織物を選ぶ時には素材を光に当てて色や細部の柄を入念にチェックし、これから作る織物をイメージしていた。私たちには同じに見える素材や糸、色も、彼女たちには違って見える独自の視点があるのだ。

別の村の女性は「今この村の衣装は青いけれども、50年前は赤かったのよ。私はこの村で生まれ育ったから赤い衣装を着ているの。」という。この村の民族衣装は自然と同化するような青い織物が特徴的で、観光客の集まる賑やかな村だ。織物の色が変わったのは外部から人が入ってくるようになってからだという。人の出入りが多くなり村は栄えているが、織物の技術は落ちているという。青い民族衣装の表面は美しい刺繍が施されているが、裏面は刺繍のほつれ糸が無数に出ている。それは時間の節約と、裏面まで気にする人が少ないからだという。しかし赤い民族衣装の女性は、昔ながらの技術を伝えるかのように衣装を裏返して身に付けており、その織物には一切のほつれ糸が出ていない。もちろんその内側には美しい刺繍が施されていて丁寧な仕事をする女性であることがよくわかった。彼女の姿からは土着の伝統と技術への誇りがハッキリと現れているように思えた。

織り柄が緻密に入った民族衣装は非常に重たい。しかし、緻密であればあるほど、美しく高い技術が必要となる。そしてそれは、雨風を防ぐことができる。その中で彼らは試行錯誤をしている。ある村では、村人が集まり新しい柄（デザイン）を考案し民族衣装のマイナーチェンジしている。ある男性は、緻密に柄を入れながら軽さと着心地を追求していた。ただ一枚の織物を羽織っているだけのように見えるポンチョだが、首回りの快適さを考えながら、糸の細さを作り分け、アルパカの糸と羊の糸を使い分け、柄の入れ方を工夫していた。彼の織物作りは職人技がいたるところにあり、今も進化する織物の姿があった。民族衣装は生きた化石ではなく、今も進化する衣装なのだ。

このように、自らが着る民族衣装には強いアイ

デンティティが存在し高い技術と工夫がある。それは伝統文化を受け継ぐ上で欠かせないもののように思える。しかし民族衣装を身に纏う人々にも近代文明という新しい世界を知る機会が増え価値観も変化している。今の状況の中で、民族、伝統といった独自の文化に対する価値や魅力、そしてそれと直結した豊かさに目を向けて行かない限り、文化は衰退し、彼らは民族衣装というアイデンティティを手放してしまうように思えてならない。彼らが身に着けている民族衣装は、何ヶ月も時間をかけて作られた唯一無二の物である。それはとても手軽に安価で作れる品物ではない。しかし一方で民芸品という彼らの技術を生かした商品は世の中に増えてきている。これからは、民芸品という生活のための商品づくりとともに、今まで培われてきた技術が絶えることのないよう、民族衣装とその技術に対する価値を見直し高めていくことが、彼らの伝統とアイデンティティの継承に繋がっていくと私は考えている。

(2016・8・30 記)

#### 4. ボリビアなど開発途上国向け

##### 中古車・中古医療機器の輸出ビジネスとその社会貢献について

(株)タウ 代表取締役社長

宮本 明岳

当社は1996年にさいたま市で、事故や災害などで損壊した損害車の買取・販売・輸出から事業をスタートし、中古自動車・トラック、オートパーツ、潤滑油、建機、農機、医療機器などの分野で内外のお客様のニーズに応える形で取扱商材を拡大してきました。現在は国内19支店、海外5拠点を構え、世界110ヶ国以上の国々にこれらの商品をインターネット経由で販売しています。当社のメイン商材を含む中古車は、日本全体で年間約100万台が輸出されています。

当社はメイン商材である自動車のリユース・リサイクルビジネスを通じて、大きく3つの点で日本と開発途上国の社会に貢献しています。

1 点目は海外輸出先国への経済的貢献です。自動車は日常生活に欠かせない移動・輸送手段ですが、開発途上国ではユーザーに高価な新車を購入する経済力がなく、そもそも自国では生産できないため、新車の購入が困難な人々がまだまだたくさんいます。一方、中古車は新車よりも比較的安価に購入できるため、低価格且つ高品質な「日本製」の「中古車」への需要は非常に高く、さらに普通の中古車ですら高価なため、価格的にリーズナブルな「損害車」を日本から輸出し、現地で修復して使うことが普通に行なわれています。この一連の流れでは、「損害車修復業者」「修復用オートパーツ業者」「修復済中古車販売業者」といったバリューチェーンが有機的に繋がり、「日本製・中古車」の輸出が、輸入国で雇用を生み出し、経済の発展に寄与しています。

2 点目は、「カー・トリアージ」という概念のもと、損害車を「修復利用」「部品利用」「素材利用」の3つに区分し、どんなクルマでも最大限に活用できるように、効果的なリユース・リサイクルに取り組むことによる環境改善と資源節約への貢献です。元々、トリアージとは災害・事故現場などで一時に大勢の死傷者が発生した場合に、やむを得ず重症度によって治療の優先度を定めることを意味します。タウは自動車の専門医として、損害車のダメージの程度を見極め、その後の処置を決める役割を担っています。損害車をそのまま廃車するよりも修復して再利用することにより、車を新たに生産して資源を消費し CO2 を発生させるのを止め、環境と資源へのマイナスの影響を少なくすることができます。

さらに3 点目は、海外での日本製品の知名度・認知度向上への貢献です。現在、世界各国に日本製新車が輸出され、現地でも生産され使われていますが、開発途上国の自動車関係ビジネスは日本製中古車の輸入から始まった国が結構あります。

最初は船員や軍人が持帰り手荷物として日本製中古車を個人輸出するところから始まり、それがビジネスとしての輸出へと発展し、業者の増加、

台数の増加とともに、日本製中古車の品質・性能の高さや耐久力、修理用部品の補給力が認識されて評判が高まりました。

輸出先国の経済発展に伴い、ボロボロの中古車から、より程度の良い高年式の中古車や高級車に徐々にシフトしていき、最後は新車へ到達します。この段階になって、日本の自動車メーカーは新車の輸出を始め、販売台数の増加に伴い、やがて現地で組立・生産を開始するに至ります。この一連の流れは、当社が10年以上もオフィスを構えているロシアで目の当たりにしてきました。スピードの違いはありますが、他の開発途上国でも似たようなステップを踏んでいます。

つまり、中古品（この場合は中古車）の輸出により日本製品の認知度が高まり、日本製品の品質と性能の良さが評価されて、新品（この場合は新車）の先駆的マーケティング活動となり日本製品（日本車）の海外販売の拡大に貢献しています。

このように当社が取り組む自動車のリユース・リサイクルビジネスは、日本と輸出先市場の双方の経済・環境・ビジネスの発展に確実に貢献するものと考えています。それはボリビアにおいても同様で、当社は以前よりボリビアをはじめとする中南米エリアのお客様に向け、インターネットを通じて当社の商品を販売してきました。ただ、ネットを介した取引のため、お客様とのコミュニケーション手段は電話かメールに限られ、特にボリビアなど南米では時差・距離・言語の問題があり、一般的には日本企業にとっては営業が難しいエリアとされています。そこで、当社はウェブサイトの多言語化（スペイン語対応）や現地出張、販売エージェントの設置、会社説明会や新聞広告などをつうじて現地における知名度・信用度の向上に努めてきました。これらの取組みにより顕在化した中古車への旺盛な需要にさらに応えるべく、2012年7月に南米の太平洋岸玄関口であるチリの首都サンチャゴにオフィスを開設しました。これにより、それまであった時差・距離・言語の問題を解決し、お客様との地理的・心理的距離感を

縮めた結果、ボリビア向けの輸出は大幅に増加しました。中古車の輸出・販売事業をつうじて、現地中古車流通の活性化のみならず、現地の中小企業や個人事業主を対象とした中古車輸入ビジネスのノウハウの提供や、それにより発生する修理・整備に係る雇用の創出などに地道に取り組んだことに対して、2016年6月にボリビア多民族国の立法議会より感謝状を授与されました。



写真5 感謝状贈呈式の模様

そして当社では次なるステップとして中古車事業で培ってきた仕入・輸出・販売のノウハウを活かし、現在、中古医療機器（医療・介護用ベッド、車椅子、超音波診断装置等）の開発途上国向け仕入・輸出・販売に取り組んでいます。顧客から引き合いがあったことも取り扱いを開始した理由の一つですが、マネジメント層も含めた当社社員が出張先や海外オフィスで、発展途上国の劣悪な医療事情に直面したことが大きな動機となっています。ボロボロのベッドや車椅子を使っている患者さん達、ベッドが足りない病院、新品を購入する余裕がないため壊れた画像診断機ではきちんとした診断をする事ができないドクター、このような状況を目の当たりにして、当社の力で何とかならないものかと真剣に思案し取り組みを始めました。これまでにベッド、車椅子、画像診断機を東南アジア、南米エリアに輸出しています。また、2015年にはNPO法人ジャパンハートを通じてミャンマーに超音波診断装置を寄贈しました。ボリビアについては、2016年9月よりニーズの高い中古の医療用ベッド、車椅子、超音波診断装置のトライアル輸出を始める予定です

このように中古医療機器の輸出を通じて開発途上国の医療レベルの向上に貢献することはもちろんのこと、前述の自動車と同様に中古品（中古医療機器）の輸出により、日本製医療機器の知名度を向上させ、新品（新品医療機器）の輸出拡大を実現させ、修理・部品補給・販売のバリューチェーンも整備して、日本の医療機器業界の海外進出に貢献したいと考えています。

当社は現在取り扱っている中古商材の仕入・販売・輸出を通じて日本と開発途上国との両方に貢献すると共に、今後もリユース・リサイクル分野での新しい商品、ビジネスにチャレンジし、当社が開発途上国を含むグローバル市場で行なえる貢献の幅と、規模をより一層拡大して行きたいと考えています。

(2016・9・8記)

## 5. アイデンティティと言語—選択と郷愁

臨床心理士 ラパス出身  
田中ネリダ

「実家に帰ります」という表現は、夫婦喧嘩の末、妻が夫へ向けてごく普通に発する言葉かもしれませんが、しかしこの言葉は、しっかりとした戻れる場所があることを前提にしています。一つの場所に生まれて育ち、結婚して新しい家庭を設けたとしても、近くに戻れる実家があるというのは、ある意味ではとても羨ましい状況です。

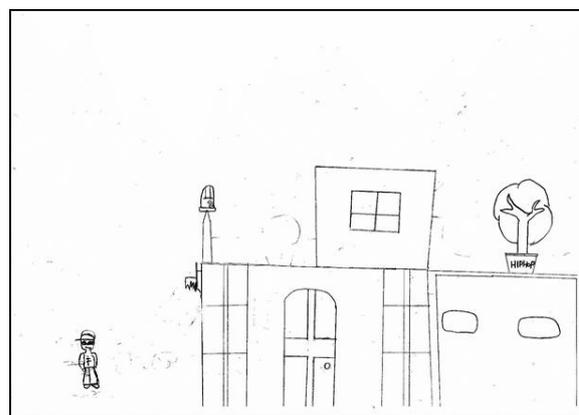


図1 日本在住の外国人児童の絵 12才 男児

世界がグローバル化してきたとはいえ、母国を離れて他の国で暮らすという環境は、それを自分

の意思で決めることのできない子どもにとっては、草や木に例えれば一つの「根こぎ体験」と言えるでしょう。実際に、日本に在住している外国にルーツのある子どもの絵を見ると、約5%が地面から生えている樹木ではなく、植木鉢の中で育っている木を描いています。これは一つの国で生まれ育った子どもにはあまり見られない現象です（田中ら, 2007）。植物を新しい土壌と環境に移植するにはメリットとともにリスクがあり、似たようなことが移住する人間にも当てはまります。

このことに触れるのは、日系ボリビア人を含め、ラテンアメリカ人の子どもとその保護者のカウンセリングに携わっているなかで、こうした状態をよく目の当たりにするからです。そこで、自分の経験も交えて、彼らのアイデンティティや言語に関して考えてみたいと思います。

周知のように、1990年の入管法の改正によって日系ラテンアメリカ人が多く来日し、一時は30万人強を数えました。ブラジルから最も多く、ペルーに続き、ボリビアは3番目に多い国です。

私は18歳で来日するまで、ボリビアのラパス市で生まれて育ちました。来日のきっかけは主に両親の希望でした。日本に来たのは自らの積極的な意志よりも、むしろ、両親が抱いていた願望によるものでしたが、日本で暮らすという選択は、その後就職と結婚を機に自ら決断しました。来日当初、日本語をあまり話せなく、文字を学ぶために家庭教師の家に毎週通い、一つの漢字に対して、何故音読みと訓読みがあるのかと嘆いていた時期もありました。その頃は学生だったので日本語を学ぶ時間もあり、何よりも沢山支援してくれた人がいたことを今でもありがたく思っています。

Leonard Bloomfield (1933) は、母国語とは母親の膝で学んだ言葉であり、その後に学ぶ言葉に対して人間は本当の自信を持ってない、と述べています。自分の場合を考えると、初めに語りかけられた言葉は日本語だったと思います。現に両親は教育熱心で日本から子供の本を取り寄せていたので、漢字は解らなくても日本語の本には馴染みが

ありました。しかし周囲の環境は全部スペイン語で、日本人が少ないラパス市の環境では日常の会話はスペイン語となり、両親が日本語で話してくる時も、自分の返事はスペイン語でした。このような状況は現在、日本にいるスペイン語圏の子どもたちを観察すると同じように見られる現象です。つまり、子どもたちは両親とはスペイン語で話したがらず、日本語で話そうとします。年齢もあり、周囲の仲間に馴染もうとする気持ちとしてこれはむしろ当然なことでしょう。また、日本で育っている子どものもう一つの特徴は、スペイン語の発音が少し日本語なまりになります。自分はどうかということ、長年日本に暮らしているのにも拘わらず、未だにスペイン語なまりの日本語です。その発音の所為か、今でも出身国はどこかと尋ねられることがあります。ここまでくると、この発音のことはもう仕方がないと諦めています。

先ほどあげた Bloomfield の母国語の定義に照らすと、むしろ、Andy Kirpatrick (2007) が指摘するように、必ずしも初めに学んだ言語が最も得意であるとは限らないように思います。この流れで、私はいったい何語で考えているかと自己観察すると、話している言語で考えていることに気づきます。ちなみに夢の中で話している言語は向かって話している相手に依ります。数字を数える際、本当に理解するためには私はスペイン語で数えなければなりません。そして最も驚くのは、目が覚めた直後、まだ寝ぼけている時、たまにスペイン語で話しており、「今度は日本語で話して」と言われることです。この体験から、母国語が何かとは簡単に説明できないのを実感します。

次に、自分の文化的アイデンティティに関して振り返ると、模索と葛藤の時間がかなりあったように思います。来日して何年間は、日本に適應するために、「日本人」になろうと考えていました。仕事に関しても、専門分野に精通するため日本語で猛勉強していた時期がありました。「あなたは日本人じゃないから日本人のカウンセリングは無理でしょう」と言われたことに対して、そうではな

く人間のこころの理解にはもっと深いものがあると確信していましたので、自分にはできることを示したかったのです。経験の積み重ねによって、専門家としての自信を少しずつ築き上げてきたと思っています。



写真6 2006年7月にラパス市で撮った山々の風景

振り返ると、もし入管法の改正によりこんなに沢山の日系ラテンアメリカ人が来日することがなければ、自分は専門分野だけをより深く狭く追求していたと思います。ある時、ラテンアメリカ人コミュニティには心理的な支援が必要だから力を貸してくれと頼まれました。しばらく悩んだのち、私はラテンアメリカ人コミュニティを支援する路を選択しました。その時は意識しませんでした、尊敬していたポーランド人の神父から「あなたは自分の言語を活かすべきだ」と言われたのを今でも思い出します。もう一つ印象に残っているのは、平塚市でのボリビア独立記念日のイベントで、”Bolivianos el Hado Propicio……”とボリビアの国歌が流れた瞬間、胸に熱いものが込み上げ、他のボリビア人と同じく思いもかけず涙腺が緩んだことです。これらの経験は、スペイン語とともに自分の中のボリビア人のアイデンティティを賦活させたのです。

このようにアイデンティティとは固定したものではなく、時や場所によってダイナミックに変化する、という文化社会的なアイデンティティの見の方が適切なのかもしれません。だからこそ、日本の文化に適応した結果、言葉に代表される母

国の文化を忘れて見える子どもを見て嘆いている親に希望を持ってもらいたいものです。根気をもって長い目で見ると言っておきたいです。アイデンティティはダイナミックなものであり、ある段階で両方の文化を取り入れてバランスのとれた形が得られると思います。(Kanno, 2003, Norton, 2013)

確かに、アイデンティティを模索する思春期にどのような仲間と、どのような環境で、どのような経験をしたかはアイデンティティの一つの核を作るように思われますが、人生の岐路でどのような選択をするかも同じように大切なのかもしれません。

その選択には得るものと失うものがあります。郷愁はその結果湧いてくる思いであり、Illimaniの山の風景はもちろのこと、ラパスの乾燥した荒い独特の山肌を愛おしく思い出さす所以だと思います。

(2016・9・16記)

田中ネリ・阿部裕・井上孝代・岩木エリーザ (2007). S-HTPでみる在日外国人児童のこころ ―ボリビア人児童との比較―. 明治学院大学心理学部付属研究所紀要, 5, 15-31.

Bloomfield, Leonard (1933), Language. University of Chicago Press

Kanno, Yasuko (2003), Negotiating bilingual and bicultural identities: Japanese returnees betwixt two worlds. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Kirpatrick, Andy (2007), World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching, University Press.

Norton, Bonny (2013), Identity and language learning: Extending the conversation. Bristol: Multilingual Matters

## 会員入退会

2015・4・1－2016・3・31

### 個人会員

入会 上崎雅也、河合勝、椿秀洋、  
ミゲル・ギャルソン

退会 大野透太郎、榊玲子、高橋臣夫、  
知花弘和、中部全人、ポーモント愛子、  
松本新治、三浦光、和気克幸、  
渡邊英一郎、小川秀樹

逝去 橋本郁夫、金木克公

### 維持会員

退会 (株)ユニエックス(小野正明)

維持会員から個人会員へ移行  
(株)G & G(加藤謙三)

### 期末会員数

個人会員 71名、維持会員 8名、合計 79名

2016・4・1－9・30

### 個人会員

入会 千坂平通、中村芙美子、本間奈生美、  
三浦左千夫、馬場悠男、江崎浩司、  
日高憲三、大川裕司、猪岡愛佳

逝去 林屋永吉

### 維持会員

入会 NPO法人 日本ボリビア技術協力会  
(土肥次郎)

退会 (株)海外移住旅行社(保崎利根雄・破産)

### 代表者変更

(学) 阪神学園・小川秀樹(逝去)につき  
清原克哉へ変更

2016・9・30 現在会員数

個人会員 79名、維持会員数 8名、合計 87名

## ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

- ① 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9  
100 años de historia de  
la inmigración japonesa en Bolivia  
2を原典として2012年までを追補  
在庫多数
- ② 『ボリビアに生きる』 2000-3

日本人ボリビア移住 100 周年誌  
在庫 1 冊

- ③ 『大地に生きる沖縄移民』 2005-12  
コロンビア・移住入植 50 周年記念誌  
2017-2 在庫予定
- ④ 『拓け行く友好の懸け橋』 2005-12  
カンファン日本人移住地入植 50 周年  
記念誌 在庫 1 冊
- ⑤ 『ともに 50 年そして未来へ』  
2006-12  
カンタリス中央日本人会 50 周年記念誌  
在庫 1 冊
- ⑥ 『ラパス日本人会 90 年の記録  
1922-2012』 2012-10,  
2017-2 在庫予定
- ⑦ 『ギュンターの冬』 2016・7  
パラグアイのストロエスネル独裁政権時代を  
描いた異色のミステリー政治小説  
在庫多数

### 統一価格①—⑦共 2500 円 (税送料込)

ご注文は当協会まで、下記へメール又は  
電話で、お名前、ご住所、電話 #、  
書籍名、冊数をご連絡ください。

[admin@nipponbolivia.org](mailto:admin@nipponbolivia.org)

042-673-3133

御支払は銀行振込でお願い致します。

(口座 #, 名義人は発送時に連絡します)

### 編集後記

今回は前号の遅れを挽回して些か早く  
27 号をお届けします。今回も登山、武士  
道、民族衣装、企業進出、言語など様々  
な分野の寄稿を頂きました。執筆者の皆様  
へ厚く感謝致します。

会員の皆様には、読まれたうえでの  
ご感想などをお寄せ頂けると幸いです。

編集委員：白川光徳 細萱恵子 杉浦 篤



会員各位様

平成 28 年 10 月 24 日  
一般社団法人 日本ボリビア協会  
会長 白川 光徳

協会主催クリスマスイベント（講演会と懇親会）のご案内

拝啓

会員の皆様におかれましては、時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、恒例と成っております当協会主催「クリスマスイベント」には会員各位をはじめ皆様に毎年多数ご参加いただき誠にありがとうございます。本年も下記の通り開催することとなりました。

本年はギタリスト、ラテン音楽評論家の三村秀次郎さまの全面的な協力により講演会、そして懇親会での音楽演奏もお願いいたします。講演会は「ラテンアメリカ音楽あれこれ」と題し、ボリビアのfolkloreを含めて広くラテンアメリカ音楽について語っていただきます。三村さんは、日本ラテンアメリカ文化交流協会「アミーゴ」の会長を務める一方、ラテン諸国の優れたアーティストを度々招聘し、日本国内でのコンサートを開催。数々のコンサートのプロデュース、レコーディング・ディレクターも務め、ますますラテンアメリカとの文化交流に意欲を燃やされています。三村さまの講演からどんなラテン音楽の世界が広がるか、楽しみです。

そして講演会の後、会員相互及び関係者との親睦を目的とした、クリスマスパーティー（ビュッフェ形式の会食）を予定しております。パーティーの中で講演をお願いした三村秀次郎さまと大野春樹さまのDUO、Los Hermanos（ロス・エルマーノス）のラテン音楽演奏を楽しんでいただきます。

本イベントは会員の方を対象にご案内しておりますが、非会員の方も参加可能です。ご家族あるいは知人、友人の方でボリビアに関心のある方々の出席をお待ち申し上げます。

なお、出席の可否につきまして、本案内をメールで連絡させていただいた方はメールにて、郵送させていただいた方には、返信用ハガキにて返信していただけますようよろしくお願い致します。なお、会場の関係で申し込み順に先着 40 名様程にて受付を締め切らせていただきますので、早めのご返信をよろしくお願い申し上げます。

敬具

記

- ・日時：平成 28 年 12 月 1 日（木）午後 6 時～午後 9 時
- ・場所：Salon de Juliet サロンドジュリエ：昨年と同じ歌舞伎座近くのレストランです。（〒104-0061）東京都中央区銀座 5-13-16 東銀座三井ビル 1F  
アクセス 都営地下鉄浅草線・東京メトロ日比谷線・東銀座駅下車徒歩 1 分  
TEL：03-3543-3151

・内容：

1. 講演会：午後 6 時 00 分～午後 6 時 45 分

「ラテンアメリカ音楽あれこれ」：

ギタリスト・ラテンアメリカ音楽評論家 三村 秀次郎さま

2. クリスマスパーティー（懇親会）：午後 7 時 00 分～午後 9 時 00 分

立食形式による懇親会です。途中、Los Hermanos（ロス・エルマーノス）によるラテンアメリカ音楽の演奏がございます。

・参加費用：会員 2500 円、非会員 3500 円

・申込み締切り：平成 28 年 11 月 20 日（日）

- 3 当日連絡先 090-9682-4822 永井

以上

